

ゲーテの『ファウスト』 第二部に於ける天使達の合唱

長谷川 茂 夫

ゲーテの『ファウスト』第二部第五幕も大詰めに近づく「埋葬」の場では、賭けの言葉を発した刹那に生涯を終えたファウストの「不死なるもの」¹⁾が、メフィストーフェレスの手から奪われる経緯が描かれている。メフィストが魂と呼ぶこの部分は、契約によって当然彼の所有に帰すべきものなのだが、「近頃は悪魔から魂をかつさらう手立てがいっぱいある」²⁾ので、彼が用心のために手下の魔物どもを呼び出し、近くに地獄の口を開けさせて魂の分離する瞬間を待ち受けているところへ、「右上方から栄光」³⁾が射して一群の天使達が現れ、薔薇の花を撒き散らすと、それが悪魔達の吹く息に触れて炎となり、悪魔達は総崩れとなる。メフィスト自身も炎の影響を受けて自分の本性を見失っているうちに、任務を果たした天使達は上空へと飛び去って行く。この経緯のうちには、ファウストの帰属に関して天使と悪魔が互いの正当性を主張する論争は含まれていない。それどころか、一箇所の例外を除いて、天使達はメフィストと対話さえしていないのである。すべての事柄は天使達によって一方的に遂行される。「天上の序曲」での「主」とメフィストとの賭けにも拘わらずファウストが——形式的には天使達に導かれて——昇天することの意味については、それが旧約聖書の神がヨブに対して行った措置に相当するものであることを、筆者は別の論文で述べた⁴⁾。神の絶対的な正当性を根拠にメフィストは敗退しなければならない。それでは、このように動かすことの出来ない事柄に関して天使達がわざわざ派遣され、彼らが「合唱」として働くことは、何を意味しているのであろうか。一読するところでは筋の進行との直接的な関係は欠き、極めて一般的に愛を讃えるだけのように見える彼らの合唱は、実のところ一つの目的のために、それ自体の内的必然性に従って綿密に構成されている。本論では、その目的がファウストと天使達との合一であることを論証してゆきたい。

ゲーテの思想に於いて救済の実現は、言わば上と下との呼応があって初めて可能となる。エッカーマンに対しゲーテは「山峡」の場からの引用を示してこう語っている。

「 精神世界の高貴な一員が
 悪から救われました。
 たゆまなく努め励むものを
 私たちは救うことができます。
 そしてこの人にはさらに
 上からの愛が加わっているのです。
 祝福された群からこの人に
 心からの挨拶を、ようこそと。

この詩句にファウスト救済の鍵が含まれている。ファウスト自身の内部には最後までますます高まり純粹になる活動性、そして上からは彼の助けになる永遠の愛。これは、我々は自分の力だけではなく、それに付け加わる神の恩寵によって救済される (selig werden) という我々の宗教的観念と完全に調和している。』⁹⁾

ファウストが死の瞬間まで「活動的で自由な (tätig-frei)」⁹⁾ 生の継続を望んだことは、「救済」の内容を規定し、その実現への充分な訴えかけとなっている。そして上からの恩寵たる愛の担い手として天使達が派遣されるのだが、彼らは単に荷物を運ぶように「ファウストの不死なるもの」を引き上げてゆくのではない。「薔薇」を媒介として、まずファウストと一体化し、ともに成長しながら上へと昇ってゆくのである。それでは実際に本文を読んでみよう。その際に「天使達の合唱」を、それらがテキストに登場する順番に従い、便宜上第一節から第六節までの名前を付けて呼ぶことにする。

第一節 (第11676行～第11684行)

Glorie von oben rechts.

HIMMLISCHE HEERSCHAR.

Folget, Gesandte,
 Himmelsverwandte,
 Gemächlichen Flugs :
 Sündern vergeben,
 Staub zu beleben ;
 Allen Naturen
 Freundliche Spuren
 Wirket im Schweben
 Des weilenden Zugs !

(右上方から栄光)

天国の軍勢

後に続きたまえ、御使たちよ、
御空の血管よ、
ゆったりと飛びながら。
罪人を許すために、
塵に命を与えるために。
生きとし生けるものに
優しさのしるしを
及ぼしたまえ
浮かび漂いながら！

この第一節は必然的に自己紹介の性格を帯びざるをえず、彼らが天から遣わされて来たことが述べられ、その使命が「塵」から生まれ塵に帰った罪深い人間に命を与えることであると明らかにされる。それに従い、ここで「天国の軍勢」と和訳した呼称が、次からは「天使達の合唱」と変わる。両者の間に構成主体の違いはないと考えてよい。次の「山峡」の場で初めて、彼らが「未成熟の天使達(die jüngeren Engel)」と「やや成熟した天使達(die vollendeteren Engel)」の二つの部分に別れうると判明するのであるが、この時点では「後に続け」という呼び掛けは、自分達自身にむかってなされているとの解釈が妥当である。しかし、彼らが完全に成熟した存在ではないことは、メフィストの「ガキっちょやアマっこみたいな(bübisich-mädchenhaft)」⁷⁾という台詞で、すぐさま明示される。そして、この未成熟性こそが、彼らに必要な特性なのである。世俗的な生を終えたばかりのファウストが、最初から天使達と同質ではあり得ない。同化は両者の成長を通じて達成されるのであり、その為には天使達も成長の余地を残していなければならないのである。

第二節 (第11699行～第11709行)

CHOR DER ENGEL, Rosen streuend.

Rosen, ihr blendenden,
Balsam versendenden!
Flutternde, schwebende,
Heimlich belebende,
Zweigleinbeflügelte,

Knospenentsiegelte,
Eilet zu blühh.

Frühling entsprieße,
Purpur und Grün!
Tragt Paradiese
Dem Ruhenden hin.

天使達の合唱、(薔薇を振り撒きながら)

薔薇よ、おまえたち眩しく輝くものよ、
バルサムをもたらすものよ!
羽ばたくものよ、漂うものよ、
ひそやかに命を与えるものよ、
若枝の翼もつものよ、
薔の封印を解かれたものよ、
いそげ 華開け。

春よ 萌えいでよ、
深紅と そして 緑と!
送り届けよ 楽園を
やすらうひとのもとへ。

ファウストの魂を奪われまいとして墓の回りで身構える悪魔たちには何らの反応も示さないまま、薔薇を振り撒きながら天使達はこの第二節を歌う。最初の七行で提示されるものは、薔薇の多様な属性である。この薔薇が「愛に満ちた聖なる贖罪の女達」⁸⁾ から手渡されたものであることが明かされるのは、またしても次の「山峡」の場である。その由来への知識によって全体の展望が開けることは確かであり、本論の解釈もそれに基づいてはいる。しかし、この時点でもその象徴するところは十分に陳述されている。薔薇が「眩しく輝く」ことは、天使達の到来を告げた「栄光」との親近性を暗示し、「バルサム」に比せられるその芳香は、治癒の働きを持つのである。バルサムは、乳香とも呼ばれ聖書の時代から薬効を持って知られていた。例えば『エレミヤ記』第八章には、「ギレアデに乳香あるにあらずや彼処に医者あるにあらずやいかにして我民の女はいやされざるや」との記述があり、ゲーテの作品に即して言えば、

『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』でミニョンの遺体を保存する薬剤として「多量のバルサム」⁹⁾ が用いられている。この治癒力は、「ひそやかに命を与える」という第四行の規定に対応する。そして、「羽ばたき、漂い」ながら「命を与える」薔薇が、「ゆったりと飛び」「漂いながら」「塵に命を与える」第一節の天使達と同一の本質を付与されていることが浮かびあがってくる。天使達が薔薇を振り撒くのは、悪魔達を退散させることを主要な目的としているのではない。天使達は、言わば自らの本質を辺りに充満させて、「生きとし生けるもの」を自分と同化させようとするのである。言うまでもなく、その目標の中心は、「やすらうひと」即ち「塵」に還ったファウストである。薔薇がファウストと天使達との同化を仲介するというこの構図は、その薔薇を天使達に託した贖罪の女達が後にファウストと栄光の聖母との仲立ちをすることと重なり合う。悪魔達に関して言えば、彼らはファウストを取り巻く位置にいるので必然的に薔薇の洗礼を受けるが、しかしその本質と根本的に対立する要素であるが故に同化できず、かえってダメージを受けるのである。天使達にとって悪魔達は敵とするに足りない存在である。アレンスは、モーゼの遺体をめぐって善と悪の精霊が戦ったという伝説をゲートが「荒唐無稽なユダヤの御伽噺」¹⁰⁾ と呼び、天使が「栄光のうちに」¹¹⁾ モーゼを運び上げようとしているときに、悪魔は本来何の力も持ち得ないと考えていた事を紹介している¹²⁾。ここでの天使達は、自分に同化できるものに対してのみ歌い、自らメフィストに呼びかけることはしていない。両者の間には越えることのできない隔絶性が存在する。

第五行からは、やはり成長の要素が提示される。薔薇は、その年に伸びた若枝のみを花枝として、その先端に蕾をつけるので、小枝（若枝と訳した）・蕾・開花というこの三行の順序は、成長の順序を述べていることになる。ちなみに、Zweigleinbeflügelte は、「小枝を翼としたもの」ではなく「小枝に（葉の）翼をもつもの」の意味かもしれない。古い枝から互い違いに伸び、その先に花を付けたものを翼と呼ぶことには違和感を禁じ得ない。植物学を研究し薔薇を愛したゲートが、この点に無頓着であったらうか。

第八行以下では、上述の成長の過程が、新たな生命の萌えいでる季節である「春」という言葉で言い変えられ、その「楽園」的な状況に「やすらうひと」であるファウストも含まれるべきであることが言われている。

第三節（第11726行～第11734行）

CHOR DER ENGEL,

Blüten, die seligen,

Flammen, die fröhlichen,
 Liebe verbreiten sie,
 Wonne bereiten sie,
 Herz wie es mag.
 Worte, die wahren,
 Äther im Klaren,
 Ewigen Scharen
 Überall Tag!

天使達の合唱

花、祝福された花、
 炎、喜ばしい炎
 それは愛をひろめ、
 それは歓喜を呼び起こす、
 心にかなうほどに。
 言葉、真実の言葉、
 澄み渡る空なるエーテル、
 永遠なる群に
 おしなべて昼の光!

悪魔達の息に触れ薔薇という形象が炎の形象へと変化した後の第三節は、一種の昂揚感に包まれ、楽曲に譬えればストレッタの緊迫性を帯びている。詩句の成り立ちについてクルト・マイの言を借りれば、「文の構成要素が層を成す石材のように無拘束に重ねられたままになっており、そもそも完全に分肢が整い精選された文法的な文が組み立てられていない。」¹³⁾

ここでは極めて圧縮された表現のうちに、本質の様々な側面を象徴する形象が重層化する。薔薇の花は祝福を意味し、それは与える側から言えば愛である。そして愛を炎として受け取ったものの内部には歓喜が呼び起こされる。無論その作用は、受け取り手の心次第であり、悪魔にとって炎は、「異質な、おもねりの火 (fremde Schmeichelgut)」¹⁴⁾ に過ぎない。

「すべてのものを作り上げ、育む全能の愛」¹⁵⁾ に適う豊かな象徴群とそれに係わるもの達との合一を意図する詩句においては、この意味の多重構造こそ、むしろ目的となっているのである。このような多重構造のなかで名付けられる「真実の言葉」とは、愛を備えた言葉でなければならない。薔薇がその象徴性

の伝統のなかで言葉と結び付くことは自然であり、またこの場面での特殊な性格から見れば、天使達が現に歌っている「言葉」として、言葉は薔薇とともにファウスト救済の重要な担い手なのである。

「エーテル」は、本来純粋に空想上の概念である。アリストテレスによればそれは、「古人が土・火・空気・水のほか、なにが別種の第一物体が存在すると考え、その最高の場所をアイテルと名づけた」¹⁶⁾ものとなっている。しかし、「アナクサゴラスは……(中略)……火のことをアイテルと名づけている」¹⁷⁾ように、一般に概念の混乱が存在することも事実である。いずれにせよこれは、「栄光」を原点とし「眩しく輝く」薔薇と炎からなる象徴系列の中で、またひとつ本質を別の名で呼んだものであろう。それぞれの名前が本質のそれぞれの特性を表すのである。しかし、「Äther im Klaren」という句がこれまでの脈絡に於いて新奇な感じを与えることは否めず、特に klar の意味するところは、この第三節の時点では明確さを欠く。これは第五節の冒頭に置かれた「Wendet zur Klarheit」によって初めて、天使たちの依ってきたところ——それは場所とも言え、状態とも言える——であることが察せられるのだが、このような了解の遅延には必然性がある。何故ならば、第三節は第五節の基礎を構成する性格を備えており、この句は二つの節を結び付ける役割の一端を担っているからである。それについては第五節でもう一度触れることになる。

完全な文をなさぬまま、そのみか完全に意味の由来を示さぬまま、畳みかけるようにして次々と呼び出される形象の列挙は、ある種の呪文や祈祷の印象を生み出す。実際に天使達は、それらによって彼らに委託された権能の発動を命じているのであろう。その結果「永遠なる群」に対してあまねく Tag が充満する。日本語では太陽光を意味する「日の光」との混同を避けるため、言葉のこなれの悪さを承知の上で「昼の光」と訳した Tag は、天使の出現に際しメフィストが言った「来て欲しくもない昼の光と一緒にやって来る」¹⁸⁾の Tag と同じ内容を持つと考えられる。両者とも殆どの訳者によって「光」の類語を用いて和訳されており、そのこと自体は正しい。この箇所にも上述の、栄光・花・炎・エーテルの系統をひくものと考えられるからである。しかしこの「昼」が、例えば脚韻のために選ばれたのであり、Licht と全くの同義であると考えてよいであろうか。ここ「埋葬」の場面に「光」が欠如していたのでないことは言うまでもない。レムール達が掲げる松明の光や、地獄の口の炎によって舞台は照らし出されている筈である。無論、これらの光と天使たちの光とを同一視すべきではない。しかし、単に光の種類の違いを示すのみ

ではない、ファウスト救済の重要な要件を、この「昼」という呼び方は暗示しているのである。

ファウストの死と埋葬が、四人の「灰色の女たち」が来訪する場面である「真夜中」からさほど時を経ずして起こっていると考えすることは、自然であろう。真夜中という言葉は、下に引用する第11593行でも繰り返し——前回は読者の目にはいるのみのト書であったので、観客の耳にそれと明確にされるのは今回が最初となる——提示される。

「時計は止まった。

止まった！真夜中のように黙っている。」

そして、この「真夜中」は、「時計が止まっている」という表現で象徴される一種の非時間性の中での刻限なのである。時間の進行が無効となり、「過ぎ去った (vorbei)」¹⁹⁾ という言葉が無意味となる。メフィストにとってそれは、悪魔が主権を有する永遠であり、虚無と同義語となる。

「それと比べたら俺は永遠の虚無 (das Ewig-Leere) が好きだな」²⁰⁾

そこへ天使たちの歌声が「来て欲しくもない昼 (の光) と一緒にやって来て、彼の永遠と対決するのである。

『ファウスト』第二部で時間が止揚される場面は、ここだけではない。「エーゲ海の岩の入江」の場面では、「月が中天から動かない (verharrend)」²¹⁾。ここでは、セイレーンたちが、非時間的な「夜」がいつまでも続くことを祈っている。

「変わることなくその高みに、

麗しのルーナよ、恵み深く留まりたまえ。

いつまでも夜が続き

昼が私たちを追い払わないようにと。」²²⁾

この場面が「埋葬」の場と共有する真に重要な特殊性は、ファウストの置かれている状況である。すなわち、彼は目下のところマントーの案内で冥府を訪れており、言わば一種の死のもとにある。しかし、主人公の「死」という状況のもと、「入江」の場面で遂行されたことは、次の第五幕へのヘレナの召還を可能にする壮麗な死と再生の秘儀なのであった。そして同様にこの「埋葬」の場面に於いても、この非時間性はメフィストの考えるような否定的性格を超越する働きを秘めている。この場面と、続く「峡谷」の場面にいたるまで、ファウストの救済と、より高い新生が成し遂げられる過程を通じて、神秘的な非時間性が、それらを可能にする条件として支配するのである。Tag は、ファウストの救済を完成させようと、グレートヒエンが栄光の聖母にすがるとの言葉の最

後にも再度用いられている。

「まだ新しい日 (Tag) が、この人の目を眩ませています」²³⁾

昼と夜は、時間的に交替して訪れるものではなく、互いに排斥しあう「永遠」として、「埋葬」の場面では同時に現出し、拮抗している。言い換えれば、光と闇との対立が昼と夜という言葉に置き換えられることによって、この場面の非時間性が浮かび上がってくるように意図されているのである。次の「山峡」の場を先取りして言えば、この非時間性においてのみ、三人の悔い改める女たちの歴史性と、第一部で既に「救済された (Ist gerettet!)」²⁴⁾ グレートヒェンが第四の悔い改める女として登場することのアナクロニズムが止揚される。また「真夜中に生まれた」²⁵⁾ 幼児たちの昇天が、一回限りのものか反復されるものかの偶然性を脱却して、ファウストの昇天との必然的な合致を獲得するのである。

そして、ここ「埋葬」の場面に限定して言えば、「永遠なる群に、おしなべて昼の光」という最後の二行は、悪魔の永遠に対立する天使達の永遠の勝利宣言ともなっているのである。

これにより天使達が遂行すべき手筈は完了して、この第三節と次の第四節の間に一応の区切りが置かれ、これからはいよいよ同化の実体が歌われる。

第四節 (第11745行～第11752行)

CHOR DER ENGEL.

Was euch nicht angehört,
Müsst ihr meiden,
Was euch das Innre stört,
Dürft ihr nicht leiden.
Dringt es gewaltig ein,
Müssen wir tüchtig sein.
Liebe nur Liebende
Führet herein !

天使達の合唱

本当に自分のものではないものを
お前たちは避けなければならない。
自分の真心を乱すものに
お前たちは甘んじてはならない。

それが強引に押し入ってくるときには
 私たちはしたたかでなければならない。
 ただ愛するものたちだけが
 愛を迎え入れる！

同化の過程を逆の条件の側から述べたこの節は理解しやすい。自分の本性に合致しない事柄は、それが如何に欲求を刺激しようとも非生産的であるという考えは、ゲーテの他の作品にも多く見られる。例えば『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』の基底をなすものがこれであり、『始源の言葉、オルフェウスの (Urworte, Orphisch)』では、人が逃れることの出来ない自分自身の「ダイモン」の名でこの考えは呼ばれている。ここでは、「暗い衝動のうちにあっても、正しい道を確かにわきまえている」²⁶⁾ 本性からして「善き人間」²⁷⁾ と、その障害となる否定的・非生産的な要因とが、この基準に従って分別される。「お前たち」の意味する相手は、これまでと同様である。即ち、広い意味では、「生きとし生けるもの」であり、狭い意味では、ファウストを含む天使達である。そして、もし悪魔が同化可能であるならば、悪魔をも含む筈ではある。なんとと言っても、メフィストの意識内では、天使達もやはり悪魔と同類なのである。

「あいつらもやはり悪魔なんだが、猫をかぶっているだけなんだ。」²⁸⁾

「お前達もやはりルシファーの一族じゃないのか。」²⁹⁾

実際彼は、この同化に組み入れられそうな素振りさえみせて、こともあろうに愛を口にする。

「おれも変な気持ちになってきたぞ。どうしてあっちへ首が向いてしまうんだ。」³⁰⁾

「これが愛の要素というものなのか。」³¹⁾

この状況の下に、天使達がメフィストの呼びかけに応えるという、従来の態度からすれば唯一の例外が生じている。しかしその場合にも、すべてを自分に同化しようとする基本姿勢は完全に貫かれている。

「さあ、やってきました。なぜ退くのです。

近寄っていきますから、できるならとどまりなさい。」³²⁾

合唱という形式をとらず、普通の台詞として言われるこの言葉に、皮肉も反語も含まれてはいない。天使達にそのような悪意はないのである。しかしメフィストが考え、実際に舞台上で示した愛は、根本的に天使たちの愛とは相容れないものである。その内実は、神的なものを取り去られており、あからさまな情

欲と呼ぶに相応しい。その結果、メフィストは舞台の前部へと押しやられ、天使たちとの異質性が際立つだけとなる。

同化の条件を述べている時に用いられた「お前たち」という主語が、六行目から「私たち」に変わる。アリストテレスの用語を借りて言えば、これは前者が未だ可能態（デュナミス）であるのに対し、後者は、そのような異質の障害を排除し終わった現実態（エネルゲイア）を意識した言い方であると考えられる。同化は着実に進捗しているのである。

第五節（第11801行～第11808行）

CHOR DER ENGEL.

Wendet zur Klarheit
 Euch, liebende Flammen !
 Die sich verdammen,
 Heile die Wahrheit ;
 Daß sie vom Bösen
 Froh sich erlösen,
 Um in dem Allverein
 Selig zu sein.

天使達の合唱

澄み渡るかたへと向かえ
 お前たち、愛する炎よ！
 自らを呪うものたちを
 真実が癒せ。
 彼らが悪から
 朗らかに身を救うように、
 すべてのものの合一のうちに
 祝福されてあるために。

ここでは、第三節で構築された多重性が、遙かに分かりやすく組み直されている。実際殆どすべての行が、第三節との直接的な共通性を持つのである。重複を恐れずに対応を列挙して見よう。

Wendet zur Klarheit - Äther im Klaren

Euch, liebende Flammen - Flammen, die fröhlichen/Liebe verbreiten sie

Heile die Wahrheit - Worte, die wahren
 Froh sich erlösen - Flammen, die fröhlichen
 Selig zu sein - Blüten, die seligen

上の例ほど明確ではないが、この対応のうちに Allverein と Ewigen Scharen の組み合わせも追加してよいだろう。

この構文上の完成度は、同化の完成度に比例している。天使達によって本質充滿の手段として用いられた薔薇=炎は、「お前たち、愛する炎」と呼ばれることで、再びその本質と、その担い手である天使達自身とも合一しているのである。そして、第三節では曖昧だった「澄み渡る方」が、到達すべき目標として把握される。天使達はそこへの帰還を意識し始め、それはそのまま、ファウストに対する誘いとなっているのである。また、未だ呼びかけの対象であった「真実」が、ここでは治癒の効力を発揮する。真実とは、ここまで読んできた意味の上から、天使達が現に行っている行為そのものを指すと解釈してもよいだろう。そして前節の排除によって、メフィストもその一部である「常に悪を欲する力」³³⁾ から身を解き放ったものは、祝福を受けるべき存在として Allverein に加わる。これは、ファウストと天使達だけにとどまらず、この節で融合された多層的象徴の構成要素すべてを含み、更には、彼らと同化できる本性を備えたあらゆるものに対しても扉は開かれているのである。

第六節（第11817行～第11824行）

CHOR DER ENGEL.

Heilige Gluten !
 Wen sie umschweben,
 Fühlt sich im Leben
 Selig mit Guten.
 Alle vereinigt
 Hebt euch und preist !
 Luft ist gereinigt,
 Atme der Geist !

天使達の合唱

聖なる灼熱！
 その灼熱が取り巻き漂うものは、
 生命の内に善人たちと

祝福されていると感じる。
 皆がひとつとなり
 身を起こして褒めたたえよ！
 大気は清められた。
 精神は息づけ！

合一は成就した。前節で生み出された「すべてのものの合一」は、「聖なる灼熱」と呼ばれ、その灼熱の内に含まれて一体化しているものには、生命と祝福と善とが認証される。余すところは、高みへと飛び立つために身を起こし、この神秘を可能にしたものを褒めたたえることだけである。

第一節で述べられた「塵に命を与える」という天使達の使命は、『創世記』の神がアダムの鼻から「息」を吹き込んで生命をあたえたことに密かになぞらえられている。

「エホバ神土の塵を以って人を造り生氣（いのちのいき）を其鼻に嘘入（ふきい）れ給へり人即ち生靈（いけるもの）となりぬ」³⁴⁾

彼らによってファウストの不死なる精神は、再び息づくのである。

しかし、ファウストの救済はこれで完成するわけではない。彼の浄化と、より高度な救済の過程は、次の「山峡」の場で描かれることになる。

註

- 1) 第11824行に続くト書。本論で使用したテキストは、Goethes Werke. Hamburg 1967. 8.Aufl.
- 2) 第11614～5行
- 3) 第11675行に続くト書。
- 4) 「メフィストとヨブ」鹿児島大学文科報告 第29号 第3分冊 1994年。61～69頁。
- 5) Eckermann: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens. 1831年6月6日。
- 6) 第11564行
- 7) 第11687行
- 8) 第11943行
- 9) 第八卷第八章
- 10) F. Müller 宛の書簡。1781年6月21日付。
- 11) 同上
- 12) Arens, Hans: Kommentar zu Goethes Faust II. Heidelberg 1789.S.967f.
- 13) May, Kurt: Faust II. Teil. In der Sprachform gedeutet. München 1962.
- 14) 第11725行

- 15) 第11872～3行
- 16) 『天体論』第一卷第三章。(岩波書店「アリストテレス全集 4」12頁)
- 17) 同上。中略は筆者。
- 18) 第11684行
- 19) 第11595行
- 20) 第11603行
- 21) 第8032行に先立つト書。
- 22) 第8088～91行
- 23) 第12093行
- 24) 第4611行
- 25) 第11898行
- 26) 第328～9行
- 27) 同上
- 28) 第11696行
- 29) 第11770行
- 30) 第11759行
- 31) 第11784行
- 32) 第11778～9行
- 33) 第1335～6行
- 34) 第二章